

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年12月21日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 177】

偉大な指導者を失ったJR総連・東労組内の対立勃発は不可避か？

前号に続き、JR東労組松崎明元会長の死去による影響について考えてみたい。

本号では、JR内革マル派、および、JR総連とその構成組織の執行部に関する影響を検証する。松崎氏の死去を受けて、JR総連は翌日の12月10日付「JR総連通信 No.999」において、同氏の写真とともに、以下の追悼記事を掲載した。

追悼 ー抵抗とヒューマンイズムの精神で障害燃やし続けた労働者の生き様を称えるー
松崎明 さん JR総連元特別顧問の松崎明さんが12月9日23時12分にご逝去されました(享年74歳)松崎氏は、何よりも平和と自然と人間を愛し、抵抗とヒューマンイズムの精神で、全世界における労働運動の大舞台上で、生涯、労働者魂を燃やし、闘い続けてこられました。謹んでご冥福をお祈りします

2002年に全役職を退任して8年以上が経過しているが、JR総連の松崎氏への賞賛は尋常ではなく、まさに個人崇拜だ。JR東労組本部が2003年1月23日に出した「8人の中央指導部の辞任に対する見解」の一部を改めて紹介する(「No.74」)。

我々は松崎前顧問を組織外の人だとは思っていない。JR東労組の育ての親であり、紛れもなくJR東労組にとっての重鎮である。この事実は揺ぐものではない。今でも労働運動の第一線で闘っていること、卓越した洞察力と的確な判断、そして陰に陽に実践的なアドバイスをしてくれる松崎前顧問は、「余人をもって代え難い」存在である。JR東労組のみならず、日本の労働運動にとっても必要な人物である。この評価を否定し「ぶら下がり」と言うなら、それは明らかに見解の相違であって、そのように思っている者とは闘うしかないことを明らかにしておく。

最近でも、2009年10月26日付の「松崎明氏による『週刊現代』訴訟の勝利判決にあたって」なるJR総連の見解には「我々の人格的代表者」とまで記載されている。松崎氏を崇め奉る評価を否定する者とは「闘うしかない」との意気込みには啞然とするほかない。

自らに意見する者を放逐し周囲をイエスマンで固めた松崎氏

松崎氏は自らに批判的な者を次々と放逐した。組合私物化の度を増した同氏に批判的であった元JR総連委員長の福原福太郎氏もパージされた。福原氏は「松崎の右腕」とも言われた人物だ。同氏は、2005年6月、松崎氏の組織の私物化と腐敗や革マル派との関係を内部告発した「小説労働組合」を出版した。さらに、JR東労組嶋田元副委員長に近いA元企画局長が、松崎氏が会社人事に激怒し「順法闘争だ！」と叫んだ発言に異を唱えたことをきっかけに、嶋田氏のグループは徹底して追及を受けて2002年に追放された。西岡研介著「マングローブ」には「JR東労組内部で松崎の言うことに逆らうことは御法度。その直後から私たちはJR東労組内部で『組織破壊者』のレッテルを貼られ、罵詈雑言を浴びせられ、さまざまな虚偽の情報を流されました」との同氏の発言を紹介している(p.126)。

自らに意見する者を放逐し、イエスマンばかりで周囲を固めてきた松崎氏。偉大な指導者を失ったJR総連、東労組執行部において、排他的、独善的で猜疑心の強い革マル派の性質を考えれば、組織内での対立や混乱の発生は不可避ではなかろうか。かの国の世代交代を想起させる。まさか、息子に組合を継がせることはないだろうが…。